



鹿塚の由来 奈良の王寺から国道25号線を法隆寺方面へ向い、竜田川を渡ると少し上りになりますが、この坂を猫坂といいます。どうして猫なのか知らないんですが、坂の途中で旧道に入り、アーケードを潜って細い道を北に折れ、お寺の様な北六番町自治会集会所があって、西へ少し下ると「鹿塚」があります。結構大きな碑です。

『その昔、聖徳太子が多くの家臣とこの辺りを通った時、家臣の飼犬が鹿と喧嘩をして、犬が鹿の足に噛み付き、それを見た太子が鹿の手当てをして逃がしましたが、数日後、また犬が鹿を噛み殺したので、太子はこの出来事を深くお考えになり、これは前世の宿業によるもので、嫉妬からきた恨みの深さは恐ろしいものだとは悟られました。そして鹿の冥福を祈って墓を造りました。時が移り、犬もこの世を去り、鹿の墓の傍に犬の墓も造りました。この鹿塚の碑はこの伝説を忘れないように、語り伝えようと建てられたものです』

うーん、この説話はもう一つよく分からないし、「鹿塚」もこれ以上の話はないんですが、まあ地元だし、今月はこの鹿塚に関連した話を作ってみました。

厩戸皇子と来目皇子の物語 「此処は、磐余や飛鳥と違って空が広い」

厩戸はそう言うと、富尾川の岸辺の蘆原に馬を進めた。川向こうにも蘆原が広がり、その向こうには大和の国原を挟んで、春日から布留、三輪の山々が屏風のように佇んでいる。

「皇子は、此処から飛鳥の大王の宮に通われるお積りか、此処から飛鳥は遠い」
言いながら、大臣が厩戸の横に馬を進めてきた。

遠いから良いのだ、と厩戸は言った。今、厩戸の居る磐余の地は、代々の大王が権力と滅亡の悲劇を繰り返してきた所だし、飛鳥は所詮大臣の都である。それに比べるとこの地は何もない。二人が今いるのは富雄川の河口付近で、その向こうには大和川が大きく蛇行している。川岸には見渡すかぎり蘆原が広がり、背後の丘陵までは草原が広がっている。厩戸はこの斑鳩に宮を築こうとしていた。

「皇子の一族の方々も、こちらに住まいを持たれるでしょうな」

「いや、母上は、飛鳥を離れるのを嫌がっておられる」

母とは穴穂部間人皇女のことである。厩戸は彼女の長子だが、幼い頃から聡明と噂され、大王位の継承者と目された厩戸より、四歳下の弟の来目王子を母は可愛がった。それは厩戸に比べると病弱で何事にも控えめな王子の方を、母としては愛おしく思うということであろうが、厩戸は何時の頃からか、そんな母と来目王子を遠くから見るようになっていた。

「百済から援軍を請う使者がきております」と、大臣が言った。

朝鮮半島の新羅は服属を誓っていたが、叛いて倭国の友国の百済を攻めていた。「此度は厳しく我が国の武威を示さねばなりません。そのためには大王家の皇子に軍（いくさ）の神として、立って貰わねばなりません」

「私に、彼の国と闘うために出征せよと……」と厩戸が言った。

「いいえ、皇子ではございません。行って戴くのは来目王子……」

その時、川向こうの葦原が揺れ二頭の鹿がゆっくりと姿を現すのが見えた。鹿を見つけた大臣の犬が激しく吼えたが、鹿は動じる気配もなく静かに立ってこちらを見つめている。鹿は夕日を浴びて、その艶やかな毛は金色に輝いている。

「牡鹿ですな。二頭とも高貴な顔立ちをしておる。それに若い。このあたりの鹿の王子かも知れませんな」

大臣はそう云うと従者から弓を受け取り、一頭の鹿に向けて構えた。弓から矢が放たれるのと同時に、厩戸が「大臣、鹿を殺すな」と叫んでいた。だが矢は一頭の鹿を狙って正確に放たれた。その時である。突然もう一頭の鹿が飛来する矢に向かって飛んだ。矢は飛んだ鹿の喉元を貫いた。

「その鹿はもう一頭の鹿を守るために、自らの命を投げ出したのでしょうか」と、母皇女が言った。来目王子が筑紫に発ったことの報告のために、厩戸が母の住まいを久しぶりに訪れた時のことである。

『十年の春二月の一日、来目皇子をもて新羅を撃つ將軍とす。もろもろの神部、及び国造、伴造等、合わせて二万五千人を授く』

その日厩戸は、煌びやかな甲冑に身を固めた武人に守られた来目王子を、豊浦宮の前で見送った。来目王子は言葉を交わすことなく、馬上から厩戸に静かに頭を下げた。巫女たちの戦勝を寿ぐ梓弓の音が、果てしない征旅の遠さを思わせた。

「お釈迦様は飢えた虎の親子のために、自らの命を投げ出されたという話を、高句麗から来られた慧慈師から聞きました」と、母皇女が続けた。

それは釈迦の前世譚の仏教説話で、後に玉虫厨子の台座に描かれた漆絵として法隆寺に伝わっている。

「鹿はわが身を犠牲にして、仲間の鹿を助けるという話を聞いたこともあります」

「母上の言われるように、あの鹿はもう一頭の鹿を救うために自らの命を投げ出したのかもしれませんが」

「その鹿は兄弟で。弟の牡鹿が兄の牡鹿の命を救おうとして身を投げたのです」

厩戸は驚いて母皇女の顔を見た。何時ものように憂いと諦観を湛えた母の顔に、今日は珍しく強いものが漂っている。

「母上は、来目王子は私の代わりに征旅の途についたと言われるのか」

すると、母皇女は厩戸の問いに答えるかわりに

「大王家はそのようにして生き延びてきたのです。私はもう来目の姿をみることはないでしょう」と、寂しそうに言った。

その夜、厩戸は斑鳩の宮に一人の貴人の訪問を受けた。貴人は王侯のものにさえ珍しい金の宝飾具を身に付け、金の小物をちりばめた短筒の上着とベルトをしていた。しかしその顔に見覚えがあった。あの時の鹿である。

「いかにも、私はこの大和の地を束ねる鹿の王である」と貴人は名乗った。

「あの時、矢を射られて死んだのは私の弟だ。お前達が殺したのだ」

厩戸は、あの時の鹿の哀しみを秘めた眼差しを思い出した。しかし鹿を射たのは大臣の矢だ。お前の弟の鹿を殺したのは私ではない。

すると貴人はその厩戸の言葉には答えず

「お前は私の弟を殺したように、お前の弟を殺すだろう」と、言った。

「何をいう。私が来目を殺す？、そのようなことがある訳がない」

「お前は、この遠征が倭国に益をもたらさないと知りながら大臣の言葉に従った」

厩戸は驚いた。それは本当の事だった。

「お前は病弱な来目にはこの遠征は無理だと知りながら、大臣の言葉に従った」

それは違う。来目を行かせることは私の本意ではなかった。

「お前は弟が邪魔だった。戦を望まない人々が来目王子の下に集まるのを心善しとしなかったのだ。子供の頃から母親の愛が来目にあるのを許せなかったのだ」

「どうして、お前にそのようなことが分かる」

「お前と同じように、私の母親も、私よりも死んだ弟を愛していた」

鹿の王は、突然子供のような顔になると、鹿らしくないことを言った。

来目皇子の死が厩戸の元に知らされたのは、それから1年の後のことである。

『十一年の春2月4日、来目皇子筑紫に薨(う)せませぬ。……よりて周防の娑婆に殞す。後に河内の埴生山の岡の上に葬る』

鹿の王が、再び厩戸の元を訪れることはなかった。

厩戸は死んだ鹿のために「鹿塚」を建立した。



5月8日 新沢千塚から牽牛子塚古墳へ

時節柄地震の話題が多かったんですが、馬場先生の「天平17年の大地震」の話は、奈良は日頃災害が少なく真に真に住み良き所と思い込んでいる奈良県人の僕に、決して油断すべからずと警句のように聞こえました。で、とりあえず家に帰って先生の話をもとに、続日本紀の天平17年を調べてみました。

4月 27日に『この日一晩中地震があり、それが三昼夜続いた。美濃の国では国衙の櫓、館、正倉、仏寺の堂や塔・人民の家屋が被害を受け、触れると忽ち倒壊した』の記事。

5月 1日 - 10日の間の連日、及び16日、18日に『地震ふる』の記事特に5日には『地震ふる 日夜止まず』とある。さらに『是の月、地震ふること常ならず、度々地面が開き裂けて、水泉湧き出ず』の記事。

7月 8月 それぞれ2日ずつ『地震ふる』の記事。

なるほど、4月27日に大地震が発生して、5月中は連日のように余震が発生している。6月は記事がないから大分納まってきているが、8月ぐらいまでは余震が続いている。こうしてみると今回の大震災と全く同じです。美濃の国とあるので震源地は中部地方か、それよりももっと東のほうでしょう。奈良のあたりは具体的な被害の記事がないところを見ると大丈夫だったのでしょうか。ところで6月のところに次の記事を見つけました。

6月14日 『この日、平城宮宮門の大楯を建つ(平城遷都の宣言)』

この時、宮都は難波宮にありました。この年の暮れに聖武天皇と伴に恭仁京、信楽宮、難波京と放浪した宮都は無事に平城京に帰ることになります。やっぱり奈良が一番災害が少なくて住み易い所と思われたんでしょう。東大寺大仏が開眼法要を迎えるのはそれから7年後の天平勝宝4年、天平文化が絶頂を迎える時です。こうして見ると震災を境に、奈良時代は繁栄へと向かったような気がするんですが、今日5月12日は東日本大震災から2カ月目、遠い昔に天平人が復興の決意を平城宮の大楯に託したように、瓦礫の街に復興の大楯が建つ日です。

もう一つのこの日の話題はもちろん「益田岩船」、細居さんが紹介していた清張のゾロアスター教の拝火台説というのも興味深々なんですけど、牽牛子塚を見てしまうと、皆さんの意見も造りかけで放置された石槨というのが、体制のようです。

でも……と僕は帰りの電車の中で考えたんです。形が同じでも用途は違うという考え方は出来ないでしょうか。要するに益田岩船は、清張がいうようにゾロアスター教の拝火台で、墳墓の石槨を同じデザインで造ってしまったんです。

「お婆さん、これが好きだったんですもの、お墓もこれと同じ形にしたら」

最近の大河ドラマのヒロインは、これぐらいのことを平気で言うんですが、万葉文化館の横で発見された亀形石や須弥山石なんかをみていると、明日香時代は今の田園風景の飛鳥からは考えられない風景があったんじゃないか、まるでテーマパークのように、奇跡的に西アジア文化圏に近い風景が展開されていたと考えてみるのも面白いと思うんです。ゾロアスター教では死者の魂は鳥に運ばれて空に帰るのでしょうか。だから益田岩船は、あの岡のふもとに埋葬された人の魂が空に飛んでいくための抜け穴みたいなもので、だから、牽牛子塚から山頂の岩船に抜け穴が掘られているというようなことは……ないですね。

畝傍山というのはどこから見ても、非対称の独特の趣があるけど、千塚古墳から見た姿は、青空にドンと置かれて巨人の神が戯れに作った置物のようです。

連休の最後の日は初夏でした。眩しすぎるほどの緑の中を歩きました。

萌黄(もえぎ) 淡萌黄(うすもえぎ) 裏葉柳、松葉色、常盤色、千歳色、青朽葉(くちば) 木賊(とくさ)色、苔色、若竹色、老竹色 古典に見える「みどり」の表現ですが……、ええ、益田岩船の横に生えてたタケノコの大きさにはびっくりしました。やっぱり古代の人はスケールがデカイわ。